

東南アジアにおける〈都市〉の諸様相

編者のことば

矢 野

暢*

本特集号は、1981年12月5、6日の二日間、京都大学東南アジア研究センター社会科学系の主催で開催された「東南アジアの〈まち〉と〈むら〉」シンポジウムの成果である。京大会館での同シンポジウムは、以下のようなプログラムによって行われた。

第1セッション

I 都鄙関係をめぐる試論 坪内良博（京大）

II 「国家」をめぐる試論(1) 矢野 暢（京大）

III 「国家」をめぐる試論(2) 土屋健治（京大）

第2セッション

I 東南アジアのヒンドゥー都市 石井米雄（京大）

II 「ナコーン」「ムアン」とはなにか 吉川利治（大阪外大）

III マンダレーについて 大野 徹（大阪外大）

IV ベトナムの「まち」と「むら」 白石昌也（大阪外大）

第3セッション

I 西ジャワの「まち」と「むら」 村井吉敬（上智大）

II バンドゥンについて 松尾 大（大阪外大）

III 中部ジャワの「まち」と「むら」 関本照夫（一橋大）

IV 植民都市バタビアの性格 レオナルド・ブリュッセイ（ライデン大）

第4セッション

予定討論

I 白石 隆（東大）

II 前田成文（京大）

III 高谷好一（京大）

本号は、したがって、同シンポジウムでなされた研究報告のうち、7編を選んで収めたものである。選択は、大陸部東南アジアと島嶼部東南アジアの双方における〈まち〉〈むら〉関係の傾向性がよく示されるように配慮してなされたものである。本シンポジウムの準備委員長をつとめた私自身の問題意識を本号に体系的に披露すべきであったが、私の報告原稿は別の雑誌にすでに掲載されたという事情もあり、割愛させていただくことにした（拙稿「東南アジアを解く 植えつけられた都市」『中央公論』昭和57年5月号所載）。

ところで、この折の「〈まち〉と〈むら〉」シンポジウムは学界の内外に大きな反響を呼んだ。全国から集まった七十数人の研究者によって、東南アジア世界における〈まち〉〈むら〉そして〈くに〉という三者のあいだの意味連関をめぐって実に白熱した議論が展開された。

いまなぜ東南アジアの〈まち〉と〈むら〉が問題なのか、そしてそれがなぜ日本の社会科学にとって重大な意味をもつのか。問題は、第三世界の「国家」なのである。東南アジアについていえば、そこでの「国家」像と

* 京都大学東南アジア研究センター

内在的発展の論理の探究は、あいまいに放置されたままであった。そこで、ひとつの視点を定めて「国家」のなりたちを、この際徹底的に洗い直すことが肝心だという判断がなされたのである。

そのためには、ごく基本的なところにもどって、まず第三世界をつくりなしている基礎的生態空間がなにか、いわば〈むら〉がどんな特徴をもつか、から吟味し直すことが必要であると考えられた。しかし、〈むら〉は、そのレベルからどうしたら〈まち〉が生まれうるのかという問題意識抜きには正しく位置づけられないはずである。ひいては、国家形成との関連まで意識した扱われ方が望ましいといえる。

東南アジアのばあい、たしかに村落は自成的な単位としてうまく説明できるのだが、いくつかの村落がリンクしあってつくられるネットワークの結節点、質的に転換して〈まち〉的なものになる、という筋道がどうしても実証できない。東南アジアの都市形成の専門家ポール・ホイトリィが都市形成を「自成的」「他成的」のふたつにわけているが、その含みは、東南アジアの都市形成は多分に他成だということなのである。

事実、東南アジアに形成された都市は、すべてなんらかの「外力」によってつくられたものである。ヒンドゥー都市、イスラム都市、華僑都市、それに加えて植民都市と考えると、この地域の都市形成がどれほど他成的であるかがわかる。ヒンドゥー都市のばあい、クメールの「アンコール」に示されるように、巨大モニュメントを核心とする閉鎖性の強い政治空間を生み出したが、それは都市であると同時に国家でもあった。

植民都市にしてもとかく誤解されがちであって、それは膨張的であって、それが拠点となって広い領域が支配されることにつながったとみられがちだが、歴史的現実はずしも

そうではない。かつてのバタビ아가そうだが、植民都市は、内陸の後背地の「敵性」に備え、二重、三重の防禦線を敷かねばならないほど孤立した存在であった。植民都市は想像以上に脆弱な存在であった。

本来〈むら〉と〈くに〉とを結ぶはずの〈まち〉がこのように他成的であるということから、東南アジアのばあい、〈まち〉〈むら〉〈くに〉の三者はばらばらに分解されて考えられることになる。

かりにそういう状況を現実的基盤に考えたとき、第三世界のナショナリズムの問題は、まったく新しい視点からとらえ直されねばならないということになる。ナショナリズムの基盤たりうる領域空間を生み出したものは、植民都市を基盤とする植民地支配でもなければ、プランテーションに働く労働者でもなかった。むしろ、それは「ネーション・ステート」という呼び名にふさわしいある種の意味空間を考える力をもち、そしてそれに言語表現を与えることのできた西欧型知識人であった。そういうナショナリズムは、外来的な意味空間を借用したという点で、そもそも空想的だし、非土着的でもあったと思う。

本来「ネーション・ステート」などありうべくもないところに、それが生成しているところにあらゆる問題の発端があるといえる。つまり、私たちは、いったん「国家」を解体して「政治的生態空間」のレベルで第三世界をとらえ直してみる必要に迫られているのである。

そのような視点から東南アジア世界をいったんばらばらに解剖してみせた「〈まち〉と〈むら〉」シンポジウムは、まさにそういう問題意識に即しての社会科学者の新しい第一歩であったといえよう。ここに収めた7編の論文が、その事実をみごとに証してみせているのである。

なお、本特集の最後になったが、吉川利治

氏の「タイ国ラタナコーシン王朝 200周年の
記念出版物」を加えた。これは同氏が、1982

年夏、バンコクで収集された貴重な文献集で
あり、適切な解説が付されている。

Patterns of Urban Formation in Southeast Asia

Editor's Note

Toru YANO*

This special issue on the patterns of urban formation in Southeast Asia is the outcome of a collective effort by scholars, both in and outside Japan, to challenge the question of the logical relationship between the concepts of "towns" and "villages", or of "states" and "cities" in Southeast Asia.

A cross-national Symposium on this particular subject was held at Kyoto University on December 5th and 6th, 1981 at the initiative of the Social Sciences Section, the Center for Southeast Asian Studies. More than 10 papers were read, which discussed the subject from different angles. Most of the papers took up specific towns or areas for case-study of urban formation in Southeast Asia and the Symposium as a

whole was at the same time hypothetical and empirical.

The seven pieces contained in this issue were carefully selected from the papers read at the Symposium with the aim of depicting the basic tendencies of urban-rural or urban-national relationships in the region. Particular attention was paid to the balance between maritime and continental Southeast Asia.

The Editor hopes that these articles will stimulate an interest in this subject in academic circles that are concerned with shapes of societies or patterns of nation-building in Southeast Asia.

In addition to the above-mentioned articles, we include a paper by Toshiharu Yoshikawa which introduces Thai publications related to the Bicentennial Anniversary of the Thai Rattanakosin Dynasty.

* The Center for Southeast Asian Studies,
Kyoto University